

認知症になっても安心して暮らせる社会を

2022 OCTOBER

No. 507

10

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

ぼ～れぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに



群馬県支部版

わたぼうし No.470

認知症の人と家族の会

理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

巻頭言

介護保険の改悪に反対しましょう



今、国の社会保障審議会では2024年の制度改定に向けて、制度を充実とは正反対の、利用者負担を増やし、利用を抑える案についての議論が、始まっています。

■主な案■

1 利用料負担を2倍（1割から2倍）にする

（初めて2割負担が導入されたとき、境界線対象とされた人は大変な思いをしました）

2 要介護1、2の通所・訪問介護を給付からはずす

3 ケアプランの作成を有料にする
（代わりの受け皿は全く不十分です）

4 介護保険施設が多床室利用を有料化する
（所得・財産の低い層の人にとってますます入所施設が入りにくくなります）

介護保険を、あっても利用できない制度にしないために、これらの改悪に反対しましょう。

（署名の取り組みの詳細は3頁をご覧ください）

目次

・巻頭言

介護保険の改悪に反対しましょう

・おたよりから

・電話相談上半期（4月～9月）実績報告

・介護保険署名へのご協力のお願い

・へわが家の認知症ケア手帳^{③⑩}

・渡辺医院院長（当会顧問） 渡辺俊之

・クラウドファンディングに思う

・編集後記

4 1 3 3 2 1
頁 頁 頁 頁 頁 頁

これからの予定

● 11月13日（日） 渋川つどい

10時～12時 渋川市中央公民館

● 11月19日（土） 館林つどい

10時～12時 館林市中部公民館

● 11月27日（日） 県央つどい

10時～12時 県社会福祉総合センター
7階第701会議室

● 11月12日（土） 10時～16時

群馬中央医療生活協同組合伊勢崎支部

お茶飲み保健室たんぽぽ

電話相談

群馬県支部（群馬県からの委託事業）

認知症の人と家族のための電話相談

027（289）2740

本部フリーダイヤル

0120（294）456



おたよりから



医療受診の経験談です

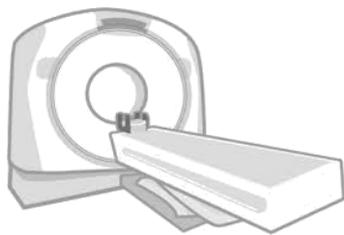
(わたぼうし 468 号を読んで)

市の検診は馴染みのないことなのでストレスが大きいようです。

①そのような時は、受付の人には必ず「認知症と診断されているのでよろしく願います」と伝えることにしています。直前には、不安に思うようなことがこれから起きるかもしれないことを本人に話します。

②また、「内科のかかりつけ医」で胃カメラをお願いしていますが、ドクター、スタッフ、場所など皆よく知っているのです、今のところ不安なく受けています。6 年たちましたが。

この前、総合病院の精密検査で MRI 検査がありました。①のような対応で検査が来ました。今後はどうなるか……。



夫を見送りました

夫が、そして私が、「家族の会」には大変お世話になりました。夫が亡くなり新盆も終わりホッとしております。その時その時、電話相談で話を聞いていただいたり、アドバイスを頂きながら見送ることができました。皆様には感謝しかありません。

ありがとうございます。

(* 編集より—この方との出逢いは、お舅さんの相談で見た 1985 年のことでした)



25 年のサークルに終止符

先日、夜のサークルに参加している留守、夫が家から出てしまい、近所の人に送ってもらって帰ってきたということがありました。家が変わらなくなったのかどうかはわかりませんが、近所の方の言うには「うちのがいなので捜している」と言ったそうです。これに懲りて、25 年間のサークルに終止符をうちました。

抗精神病薬をやめられました

母は最近睡眠時に落ち着きが出てきて、せん妄の症状もなくなってきました。逆にふらつきや翌朝ろれつが回らず、午前中ぼーっとしているという副作用のほうに気になるようになってきたため、抗精神病薬クエチアピンの服用はやめました。

薬をやめて 2 週間ほど経ちますが、睡眠には問題なく副作用も症状も出なくなりました。

母の希望で腫瘍を手術

3 か月前、母に腫瘍が見つかり本人の希望で今週手術しました。父は月の半分をショートステイで過ごし、デイサービスも増やしました。

数か月後に、両親二人が自宅で過ごせる日が訪れることを願ってがんばっています。

持病の悪化で緊急入院

夫の持病が悪化し緊急入院。延命治療について何度も問われ、いっつ命が尽きてしまうのかと不安な毎日です。なかなか落ち着かず、つどいに参加することは難しい状況です。

父が今は落ち着いています

東京在住の父は、今ではリビングからベッドがある寝室に移動もせず、ソファで一日中過ごしています。なので「肩が痛い」と言いますが、ベッドに移動しても不思議と夜中過ぎには起きてきて、テレビと電気をつけっぱなしにして朝を迎えます。以前よりも寝ていることが多くなりました。ただデイサービスには慣れた様子で、職員の方、利用者さんと話をしたり、レクリエーションに参加しているようです。

平日はヘルパーさん、週末は私と誰かしら訪問するので、今は落ち着いています。私も長時間仕事に就けています。



●報告● (群馬県委託事業)
 認知症の人と家族のための電話相談
 今年度 4 ～ 9 月の実績

群馬県支部の電話相談は、ご承知の通り県からの委託を受けて実施しています。「家族の会」が担当している電話相談は、認知症の介護をしている、あるいは経験したことがある介護家族が、同じ目線で悩みを共有しながら話を聴き、自らの介護体験をあくまで一つの経験談として話し参考にしてもらうことを趣旨としています。電話を終える時に少しでも肩の荷がおりたと感じていただけるような相談対応を心がけています。

〈相談件数〉

今年度上半期 4 ～ 9 月の相談件数は 184 件と、相談開設以来の 3 年間の同時期の 145 件、153 件、138 件に比べてもっとも多くなりました。相談件数が多いということはそれだけ介護に何らかの困難を感じている人がいるということを示しており、好ましいこととは言えません。

しかし、そういう介護者の方がいるのに、「家族の会」のような心の相談に結びついていないことも十分に

考えられます。「家族の会」の 2022 年度全国調査でも、時に認知症の人について、そんな自分に嫌悪感を抱いたことがある方が 70% いるという報告果もあります。これからも必要とする方に情報を届ける努力を続ける必要があると考えています。

〈相談者との関係〉

相談者間の関係では、娘による母の介護が 53 件、息子による母の介護が 27 件、妻による夫の介護が 25 件の順で多くなっています。

〈相談内容〉

相談内容では、相談者の心身に関わるものが 106 件、認知症の症状に関わるものが 61 件、人間(家族)関係に関わることで、介護保険サービス等に関わることが 30 件の順で多くなっています。必然的に、対応としては、知識や方法などの提供よりは傾聴を中心とする精神的な共感、支援が中心となっています。この相談の趣旨に沿った役割を果たしていると言ってよいと思っています。

ご協力をお願い!!

11 月末まで署名活動を行っています

安心できる介護保険制度を求める署名 2022

介護のある暮らしを守る制度にするために

●ご連絡いただければ署名用紙を送ります●

●オンラインでの署名も可能です●

■要望項目■

- 1 介護保険の自己負担を原則 2 割にしないこと
- 2 要介護 1、2 の訪問介護・通所介護を市町村の地域支援事業に移さないこと
- 3 ケアマネジメントの利用者負担導入(ケアプラン作成の有料化)をしないこと
- 4 介護老人保健施設、介護療養型医療施設、介護医療院の多床室(相部屋)室料負担を新設しないこと

お願い 代表理事 鈴木森夫

「介護の社会化」を目指した介護

保険制度がスタートして 22 年にな

りますが、私たちの願いに反して、

必要なサービスを必要な時に利用で

きない現状があります。今、政府は、

2024 年に向けて、さらに利用できない

人を増やしかねない見直しの検討を

始めています。それは、利用料原則 2

割負担化、要介護 1 と 2 のサービス削

change.org

で「オンライン署名」も実施しています。



<https://chng.it/N7p6jGJC>

減、ケアプラン作成への自己負担導入、介護老人保健施設などの多床室負担など、負担増と利用削減の提案ばかりで、決して認めることはできません、誰もがお金の心配をせず、必要な時に必要なサービスを安心して利用できる介護保険制度を求める署名にご協力下さい。

渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」⑩ 帰る徘徊「叱らず」防ぐ

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



1 年ほど前に、夕暮れになると「家に帰りたい」と言いだし、外に出て行くこうとする認知症患者の行動について述べたことがあります。この間、島根県出雲市で認知症の地域ケアに取り組んでいる精神科医の高橋幸男先生から、こうした「帰る徘徊」と家族対応について話を聞く機会がありました。

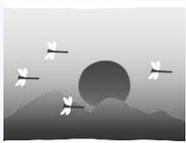
「帰る徘徊」には、認知症の人と家族の体験のずれが関わっています。まず、認知症の人はいろいろなことができなくなり、失敗が増えます。家族とのコミュニケーションもうまくとれなくなり、不安で寂しく、寄り辺ない気持ちを抱くようになります。

一方、認知症の人と接する家族は、以前の親や配偶者の姿に戻ってほしいと願い、失敗や物忘れを指摘したり、叱ったりすることが増えてきます。家族との温かい会話が少なくなると、認知症の人は孤立感を深め、混乱するようになります。

その結果、認知症の人にとって、目

の前にいる妻や夫、子どもたちは以前の「温かい家族」ではなくなり、「こは自分の家ではない」と思うようになり、家族との心のつながりが切れてしまい、以前の懐かしい家族の元へ帰ろうとして、徘徊が始まるといわれます。高橋先生は、認知症の人の失敗や物忘れを家族が指摘したり、叱ったりすることを減らせば、徘徊や暴言、幻覚など「BPSD」と呼ばれる症状の多くは軽快し、介護する人の負担が減ると説いています。

五十年近く前、家から出て行ってしまいう認知症の祖父を連れて帰るのが私の役割でした。孫の言うことは聞いてくれたからです。認知症になっても、私にとって祖父は祖父でした。失敗を指摘したり、叱ったりしない私と、祖父の心はつながっていたのだと思います。



クラウドファンディングに思う

支部代表 田部井康夫

「家族の会」では、今、40 余年の歴史上はじめて、独自の資金獲得の方法としてクラウドファンディングに挑戦しています。

なぜ、今、「家族の会」にとってクラウドファンディングなのか、私なりに考えてみました。

「家族の会」の活動は、皆さんからの会費や寄付、国や地方自治体の委託乃至補助、企業・団体からの寄付等によって成り立ってきました。

つまり、「家族の会」の活動を知りうる立場にいるも含め、知症というものに何らかのかかわりのある個人乃至団体によって支えられてきたということができません。

今日までよく続けてきたと驚き関係の皆さんに感謝の念が湧いてきます。今日まではそれでよかった、しかし、これから考えた時、新しい挑戦が必要だとは考えてきました。

今、多くの支援策が講じられています。しかし、その一つ一つの運用

の現実を見る時、やはり、認知症という病に向き合っている本人、共に生きようとする家族からすると、どうしても何かが足りない。その“心”がわかる当事者による当事者の支援がどうしても必要なのです。その活動に取り組むために、もっと多くの人の理解と協力が必要です。

そのために今考え得る手法としてこの手以外には思いつかない、というのが私の結論でした。

ぜひ、多くの方にご紹介いただけますようお願い申し上げます。

編集後記

秋らしい晴れ晴れとした天気に出会うことが少なく、一気に初冬の肌寒ささえ覚えるような日々です。最近時間に追われることが多いのは、どうも加齢による事務能力の衰えによるものだと悟り始めています。

特に SNS 関連の事は若き世話人の皆さん頼りの日々です。

(田部井康夫)

